

「絵本」とアクティヴ・ラーニング

—— 小学校における伝統的言語文化教育との融合を目指して ——

大 橋 直 義

要約

「我が国の言語文化」「伝統的な言語文化」としての「絵本」である絵巻・奈良絵本（あるいはそのデジタル画像）を用いた小学校教育の可能性について、絵巻・奈良絵本の教育的特性にも言及しつつ、『道成寺縁起』二軸（重要文化財）とその模本を用いた「絵とき」から、「後日談の想像／創造」という言語文化の存在に着目しつつ、考察を行なった。

はじめに

平成二九年告示・学習指導要領解説における「絵本」とは、小学校一・二年生が国語の授業のなかで獲得すべき〔知識及び技能〕の中の一項目「読書」に関連して、「読書に親しみ、いろいろな本があることを知ること」の具体的事例として示されるにすぎない語である。そこでは、「いろいろな本としては、例えば、物語、昔話、絵本、科学的な読み物、図鑑などが挙げられる」とされ、その「本」が内容によって分類されるのか、文体によって分類されるのか、あるいは「絵を伴う」等の形態によって分類されるのか、不分明な記載となっている。

「絵本」という語をどのように定義するか——たとえばコミックを含むかどうかなど、小稿においては深くは立ち入らないことにするが、さしあたっては、文字テキストだけではなく、そこに描かれた絵画も何らかの意味・物語を喚起している書物としておきたい。あるいは、文字さえも記されず、書物という形式ですらない掛幅絵（タペストリー）やステンドグラスに描かれた物語もまた、

ここである「絵本」とすることも不可能ではない。

教育における「絵本」は、前記の指導要領解説が示すような「いろいろな本」の一例に留まるものではない。乳幼児期における絵本の「読み聞かせ」の意義はもちろん、絵と物語との関係性ということになれば、大言すれば人類史的意義を持ちうる課題であろう。小稿が若干の考察を行なうのは、「絵本」を積極的に用いたアクティヴ・ラーニングについての具体的方法についてである。とりわけ、本邦における「絵本」の歴史——絵巻・奈良絵本に代表される絵入り本、聖徳太子・法然・親鸞といった高僧の伝記や寺社縁起を描いた掛幅絵など——との関わりにおいて、「我が国の言語文化」「伝統的な言語文化」教育との接点を見いだしたい。

伝統的言語文化としての絵本

本節においては、まず、「絵本」として定義しうるもののうち、殊に「伝統的な言語文化」と関わりの深いものを取り上げ、概観しておくことにする。

伝統的言語文化に関わる「絵本」として、おそらく最初に想起されるのが「絵巻」であろう。しかしながら、一口に「絵巻」といっても定義が難しい。徳田和夫編『お伽草子事典』は「絵巻」を次のように定義する¹⁾。

横長の巻物に絵や、時にこれに対応する文章(詞書)を加えた絵画作品。同じく巻物形式をとる作品に「図巻」「画卷」があるが、あえてそれらと区別して「絵巻」あるいは「絵巻物」と呼ぶについては、その作品の内容になんらかの筋(展開)がある場合に限るようだ。

その後、『お伽草子事典』「絵巻」は、現在「絵巻」とされている形態の書物の呼称がいかに変遷してきたのかを歴史的に確認し、次いで、その寸法の変遷に言及する。

天地の大きさは、承久本『北野天神絵巻』(北野天満宮蔵)のように五二センチに及ぶものや、室町時代になって制作された「小絵^{こえ}」のように一五センチ前後のものもあるが、おおむね三二センチ前後である。横長は、料紙を何枚も貼りつなげれば、それこそ何十メートルにもなるが、それでは実際に取り扱いが困難になるわけで、最長でも一七メートル前後が限界であろう。つまり絵巻は天地に比し横が永い、きわめていびつな画面をもっているとも言える。「…略…」絵巻特有の連続する横長の画面は、その左方向への展開性をもつが故に、話の展開や時間性の表現に優れ、筋書きのある物語や説話、伝記などを絵画化するためには最も適した画面形式であった。「…略…」むろんそうした優れた絵巻を生み出すまでには、おそらく奈良時代に仏典や中国の故事、文学作品に絵を加えた画卷が数多く輸入されて以来、四百年に及ぶ試行期間が必要であった。だがその結果、絵巻特有の表現は極度に洗練化され、類例のない高みに到達した。その意味で絵巻こそは、日本で独自に発展した絵画と称して過言ではあるまい。

長文の引用となつてしまったが、「絵巻」と呼びうる書物の持つ画面構成とその

意義について、最も鮮明な解説である。このような絵巻は、『源氏物語』絵合巻の記述から、平安前・中期の段階で複数制作されていたことがうかがわれるが、残念ながら当時の作例は現存しない。現存最古の事例としては、平安末期、後白河院がその制作に関与したと考えられている『源氏物語絵巻』(徳川美術館蔵・五島美術館蔵)・『信貴山縁起絵巻』(朝護孫子寺蔵・奈良国立博物館寄託)・『伴大納言絵詞』(出光美術館蔵)・『粉河寺縁起絵巻』(粉河寺蔵・京都国立博物館寄託)があり、さらに『鳥獣人物戯画』(高山寺蔵・東京国立博物館・京都国立博物館寄託)も同時代のものである。その後、中世から近世はもちろん、明治・大正・昭和に至るまで、日本各地で新たな絵巻が制作され続けているといっても過言ではない。このような絵巻の源流は、『過去現在因果経』の絵入り写本として奈良時代に制作された『絵因果経』などの絵入り経典であると考えられるが、中国大陸には同様の作例は伝存せず、オーレル・スタインが敦煌から持ち帰った絵入り観音経の存在が知られる程度である。すなわち、物語・説話・軍記・寺社縁起・伝記といった筋の展開のあるものはもちろん、年中行事絵巻・歌仙絵巻・職人歌合絵巻といったものまでも絵巻化し、それを制作・享受しつづけたことは、『我が国の言語文化』『伝統的な言語文化』として位置づけるに最もふさわしいものであること、間違いないのである。

絵巻の中でも室町時代後期から江戸時代前期(寛文年間頃)までに制作された絵巻と深い関わりを有するとされるのが、奈良絵本である。奈良絵本とは、『室町時代後期から江戸時代中期にかけて制作された、彩色絵入りの写本』(前掲『お伽草子事典』「奈良絵本」と定義される。前記の絵巻を含められる場合もあるが、一般的には冊子として装訂された書物を言う。「奈良絵本」という呼称の意味や、その展開の詳細については、石川透『入門 奈良絵本・絵巻』²⁾が手に取りやすく、至便である。石川は、奈良絵本の制作時期を、I期(天正頃以前)・II期(慶長頃)・III期(寛永頃)・IV期(寛文頃)・V期(元禄頃)・VI期(享保頃以降)

と分類する。ごく簡略に整理すれば、Ⅰ期が挿絵と詞書(本文)とが未分化な時代、Ⅱ期が縦三〇センチ以上の極めて豪華な絵本を制作する時代、Ⅲ期が同時期の「小絵」と呼ばれる天地二〇センチ以下の絵巻物と同様の寸法を持った横型写本が多く制作された時代である。Ⅳ期は同時代の天地三二センチ程度の大型絵巻と類似した寸法・画風・書風を持つ奈良絵本が制作され、さらにそれより一回り小さい縦二四センチ・横一七センチ程度の半紙本とよばれる寸法の奈良絵本も制作される。非常に豪華な挿絵は本文と別の料紙に描かれるようになり、同時に、その図像は形式化してゆく。以後の奈良絵本における絵は、享保年間頃に出版物として刊行された渋川版「御伽文庫」と同様に形式的なものになってゆく。

このように概観するならば、伝統的言語文化としての「絵本」を用いたアクティヴ・ラーニングという小稿の課題にとって、より効果的であるのは、絵巻に加え、図像が形式化してゆく以前の、概ね第Ⅲ期以前の奈良絵本ということになる。

絵巻・奈良絵本が「伝統的な言語文化」として有意義なものであることは分かっている。実際には、文化財の現品を用いて授業を行なうことはまず不可能である。仮に複製本が手元にあったとしても、卷子本の取り扱いには一定の訓練が必要で、小中学校における授業者がそういった技能を身に付けている可能性はそれほど高くないはずだ。しかしながら、文化財をとりまくデジタル技術の爆発的とも言ってよい進歩の中で、毎日のように、絵巻・奈良絵本の画像データが一般に公開され続けている。あるいは、『日本絵巻大成』『新修日本絵巻物全集』といった絵巻に関する基本的書籍をスキヤニングし、デジタル画像を用いて授業に供することも不可能ではない。絵巻・奈良絵本の画像データに関しては、代表的には、慶應義塾大学メディアセンターが提供する「奈良絵本・絵巻コレクション」や、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」があり、

特に国文学研究資料館が提供する「新日本古典籍総合データベース」は、研究者のみならず、初等・中等教育に携わる教員にとっても必見の情報を提供する。このように、現代社会であるからこそ、かえってこのような文化財を用いた授業をつくることができるのである。教科書というかたちで児童・生徒の前に現前する教材の「本来の姿」を知ることが、「我が国の言語文化」「伝統的な言語文化」教育として極めて有意義であるとするべきであろう。

その他、掛幅絵とよばれるタペストリー状の形態のものについても縁起絵・伝記絵の展開という点で重要であるのだが、多くの場合、そこに文字テキストが記載されていないこと、寺社などに蔵される信仰の具であるために簡便に画像を使用することができない等の理由から、小稿ではこれ以上は立ち入らないことにする。

道成寺の縁起絵巻を用いて

小稿では、具体的な事例として、和歌山県日高郡日高川町に所在する道成寺の縁起絵巻をとりあげたい。道成寺には、十六世紀前半に制作された極めて著名な絵巻『道成寺縁起』二軸(重要文化財)が蔵される。

醍醐天皇の治世、延長六年(九二八)に、後の舞台芸能では「安珍」と称されることになる年若き美僧が奥州から熊野参詣に赴く。その途上で、紀伊国の真砂(現田辺市中辺路町真砂)に住する女性——やはり後の芸能では「清姫」と呼ばれることになる女性と懇意になり、帰路にも再び立ち寄ることを約束するが、それを反故にして熊野参詣道を北上する。「安珍」を追いつめる「清姫」はその怒りのあまりに蛇体へと変じ、道成寺の鐘の中にかくれた「安珍」を焼き殺してしまう、という筋である。

安珍・清姫の物語を描いた『道成寺縁起』二軸は、織田信長に追い詰められ

た十五代將軍・足利義昭が天正元年(一五七三)十二月に由良興國寺においてこの絵巻を熟覧し「日本無双之縁起」と賞したことでも知られるほど著名な絵巻であり、江戸時代に入っても、貴顕の人びとが参詣した際や開帳の際には絵巻が扱かれていた。加えて、十七世紀後半頃にはこの絵巻の複製が制作され、それをを用いた「絵とき」が行なわれていたことが道成寺経蔵に残される文書類によって明らかである。また、この「絵とき」は現在においても道成寺院主によって日に幾度も重ねられている。

一方、これほどに著名ではないが、道成寺には、八世紀の初めの文武天皇の治世に道成寺が創建された経緯を物語る「髪長姫」あるいは「宮子姫」の説話があり、これを近世に絵巻にした『紀道大明神縁起』一軸・『道成寺宮子姫伝記』二軸も寺内に伝わっている。この絵巻を用いて「絵とき」が行なわれた痕跡は見られないが、寺内に伝来する「文武天皇尊影」「紀道明神図」「九海土権現図」の三軸を用いて、この絵巻の縁起説話に非常に近い物語が開帳興行時に行なわれていたことが分かっている⁽³⁾。

二〇一七年九月二六日、和歌山大学教育学部附属中学校が主催する「知の冒険旅行」において稿者が出張講義を担当した際、「紀伊半島のモノガタリ——日本のお話しプロジェクト」(NOP)始動——という題目の元、道成寺に蔵されるこれらの絵巻類を用いたアクティヴ・ラーニング的授業を行なった。当日の対象は同校の第三学年であったが、当日の受講生には、小学校高学年向けに考案した授業提案である旨を伝え、諒承を得た⁽⁴⁾。

さて、当日は九〇分間の授業時間であったため、初等教育の現場に対応できれば、およそ二十分の授業に対応する。受講者が六名と少数であったことから、教育学部四回生・大学院生の四名も生徒役として参加した。

第一時に該当する前半では、まず、古典籍・古文書の実物を手に取ることから始めた。もちろん、『道成寺縁起』そのものではないが、鎌倉時代から室町時

代に書写制作された書物から江戸時代・明治時代に制作されたものを教室内に持ち込み、生徒たちに実際に手に取ってもらうことにした。この日のそもそもの枠組みである「知の冒険旅行」なる教育学部と附属中学校の連携イベントでは、中学生の側が興味のある講義を事前に選択するため、稿者の講義を選択した少数の中学生は、少なからず古い時代の物語などに関心があつたものと思われる。しかし、それでも、博物館で行なわれる展覧会などでガラスケース内の古典籍を見たことはあつても、五〇〇年から八〇〇年前に制作された古典籍を実際に手に取ることは記憶に残る体験であつたものと思われる。なお、当日は時間の都合から、また受講者が少人数に過ぎたために実効性が担保できないと考えられたこともあり、アンケートなどはとらなかった。しかしながら、中学生にまじって受講している大学生に、体験活動やアクティヴ・ラーニング的活動の中で感想等を聴取するように指示している。

このような「伝統的な言語文化」の基盤となる文化財を授業内で実際に手にとらせることはかなり困難であると想像されるかもしれないが、実際には、江戸時代中後期の書物であれば、数百円という価格で購入できるものも多くある。もちろん、絵巻・奈良絵本についてはそのような価格で購入することはできないが、現代の技術によって複製を制作することも安価で行なえるようになりつつあり、「伝統的な言語文化」教育に重点を置く初等・中等教育の現場で、そのような安価な古典籍や複製品を置くことも必要となるかもしれない。また、そもそも、小学校・中学校・高等学校に設置されている図書室や郷土資料室に古典籍等が保管されている場合もあり、たとえば和歌山県立紀伊風土記の丘では、県下の学校に収蔵される文化財を集積した展覧会「学校にあるたからもの」が近年二度にわたって開催されている。その他、注目すべきは弘前大学地域未来創生センターが行なっている活動で、弘前市の東奥義塾高等学校所蔵の弘前藩校稽古館旧蔵資料の調査や、深浦町・円覚寺が所蔵する古典籍・古文書の調査

を地域住民や小中学生を巻き込むかたちで行なっていることが報告されている⁵⁾。こういった状況からも、古典籍・古文書といった文化財に小中学生が実際に接することは決して不可能なことではなく、むしろより身近なものへと意識を変革してゆく活動が今後の大学・教育機関の連携にとって重要であるだろう。

続いて、スクリーンを使用して、道成寺とその周辺の景観を紹介し、同寺に蔵される文化財について、画像によって紹介した。こういった文化財についての画像は、実際に文化財調査を行なっている研究者しか手に入らない場合もあるかもしれない。しかしながら、寺社や博物館が公刊している図録を用いることによって、同等以上の画質・内容の画像を授業内で使用することができるはずだ。

ここまでの紹介を経て、道成寺という古刹が和歌山県内のどのあたりにあるのかという地理的な位置取り(特に道成寺縁起を考える場合には、熊野三山との位置関係などの基礎知識が重要である)、文武天皇の時代や醍醐天皇の時代とはどのような時代かなどの歴史的な位置取りが教室内で共有され、児童・生徒たちの現実の生活との連続性が確認されてゆくことになる。加えて、織田信長・足利義昭など、他の授業等で耳にするに違いない事項も共有しておくことで、興味の重層化をはかった。

次いで、現在も日常的に行なわれている「絵とき」の光景を動画・音声によって紹介すると共に、江戸時代にも同様の絵とき説法が行なわれていたことについて、当時の古文書の画像とそれを翻刻・現代語訳した資料を提示して、三〇〇年前と今日との連続性について考えさせ、生徒数名を指名して感想を述べてもらった。その回答は一樣に「驚き」を示すものであった。

現在の「絵とき」の動画は冒頭の一部分だけに留め、縁起説話の全体については、絵巻の画像を用いて、授業者(稿者)が説明を行なった。一般に、絵巻や

掛幅絵が寺社に存在していたとしても、それを用いた絵解きが必ず行なわれているとは限らず、むしろ小稿の眼目である絵巻を用いた絵解きが行なわれるのは道成寺に特有のことである。したがって、より一般化された授業方法を模索するという意味で、熟練の「絵とき」を用いるより、授業者による解説という方法を選択した。その際、詞書を詳細に音読・説明するのではなく、あくまでも絵を提示して、その粗筋を簡略に説明するのみに留め、特に結末部分については、この段階では説明を行なっていない。人物間の会話のやりとりを始め、結末部の説明を省くことによって、生徒の想像力を喚起するための方法の一つとしての選択であった。

後半(第二時に対応)は受講者一〇名を二班に分け、美濃判の和紙に画材(当日は色鉛筆を使用)で縁起絵巻の一場面を描き、それをもとに登場人物のセリフを補いながら、台本を作成して即興で絵ときを行なった。その台本には、単に物語の筋を追うだけではなく、その物語を聴いている現代の観客(特に小学生)がより面白く感じたりできるような工夫を盛り込むようにとの制限をつけた。これは、現代の道成寺内で行なわれている「絵とき」でも行なわれている工夫であり、「絵とき」を始めとした口頭芸の特徴でもあるが、それがどういったものであるのかについては、前半の「絵とき」動画鑑賞の際に示してある。とはいえ、四五分間でここまでの準備を行なうことは実際の初等教育においてはかなり困難である。この場合には、事情をそもそもから理解している学部学生の補助があったことによって、かろうじて成立はしたものの、絵を描き、それを用いて、口頭で筋のある物語を語るという段階に到達するためには、さらに数時間の過程が必要であると推定される。

むしろ、この授業の最後に行なったやりとりが、絵巻を用いたアクティヴ・ラーニングとしての大きな可能性を示していた。周知のように、安珍・清姫の物語は、蛇体と変じた清姫が安珍を殺してしまい、その後、二匹の絡み合った

蛇を夢に見た道成寺の僧侶が二人を供養するための法華經会を開催すると、二人は天人となって別々の方向へ飛び去っていったとすることで結ばれるものである。この結末からは、蛇となった清姫がその後どこに向かったのか、なぜ殺されてしまった安珍までもが蛇の姿になってしまったのか、そして二人が「別々の方向」へ飛び去ってしまったのはなぜか、など、現代的な感覚からすれば、およそ理解しがたい側面に満ちている。ある意味では、現代の児童・生徒にとっては「異文化」とも言うべき側面について、なぜこのような結末なのか、当時の人びとはこの結末に納得がいったのかどうか、など、わずかな時間であったが、議論を行なった。

最終的には、当時の人びとの論理や宗教的倫理観について復元的に説明を行なったが、そこに至るまでの討論の中で、生徒からは、たとえば「じつは清姫は死んではおらず、自宅に戻った」とする説までが登場するなど、新たな具体的物語が次々と創作される事態となった。これは、日々の国語の授業における教育活動の中で、「物語の結末のさらに先を想像する」といった方法が多くとられていることによると推定される。この点において、最も重要なことは、「伝統的な言語文化」の一例である絵巻・奈良絵本を用いることによって、現代の物語を用いた授業で行なわれている「後日談の想像」以上の効果が得られるということである。というのは、先に紹介した「清姫は死んでおらず、自宅に戻った」とする説は珍妙なものでもなんでもなく、田辺市中辺路町真砂周辺では現在も通行している説であり、その後、清姫が身を投げたとする「清姫淵」やそのそばの清姫墓などが現在に伝わっている。また、道成寺の近傍には「蛇塚」と呼ばれる江戸期以降の塚もあり、いたるところで「後日談の想像」あるいは「創造」が行なわれ続けてきたのである。すなわち、授業内で児童・生徒が後日談を想像したように、往古の人びとも同様の営みをくり返してきたのであって、まさしくそういった活動こそが「伝統的な言語文化」の一例であるに他

ならないのだ。

絵巻・奈良絵本には、「昔話」として著名な物語も多く含まれ、そのような「かつて想像／創造された後日談」に関わる伝説地を近隣に有する場合も数多い。児童・生徒が生きる現代と同じような想像／創造力がかつて至るところで働いていたことに思いを馳せるといふ結論として結ばれうる、絵巻・奈良絵本を用いたアクティヴ・ラーニングは、「伝統的な言語文化」教育の一例としても、極めて有意義であると位置づけたい。

小括

粗雑なものであったことは否めないが、絵本——とりわけ絵巻・奈良絵本という「伝統的な言語文化」と位置づけられる文化財を用いて、児童・生徒の能動的・創造的な思考や活動を促しうる可能性について考察してきた。殊に、そういった物語は、現代的な通念からすれば、なぜ登場人物たちはそのように感じ行動したのかという点や、往時の人びとはなぜこの物語を面白いと感じたのかなど、疑問が残るかたちで物語が閉じられているものが多数ある。また、小稿で紹介したように、その疑問を解消しようとして、当時としては「合理的」な後日談が構想されて、それが近隣の伝説地となるような事例も少なくなく、現在の国語教育の場で多用される「後日談の想像」という手法との連続性について、児童・生徒が何らかを感じとる機会を得られる場合もある。

異文化としての古典文学や文化財にふれるのみならず、同じ物語について、現代の自分たちとは異なった解釈をする異文化としての往時の人びとの観念に思いをはせ、それを理解しようと努めることといった様々な教育的効果が、絵巻・奈良絵本を用いた教育活動から期待できる。なお、古典を「異文化」として読むことについての実際的方法については、別に論じた⁶⁾。

注

- (1) 徳田和夫編『お伽草子事典』「絵巻」(執筆・榊原悟。東京堂出版、二〇〇二・九)。
- (2) 石川透『入門 奈良絵本・絵巻』(思文閣出版、二〇一〇・九)。
- (3) 大橋直義「道成寺建立縁起の展開と来歴」(和歌山県立博物館特別展図録『道成寺と日高川——道成寺縁起と流域の宗教文化——』二〇一七・一〇)等。
- (4) なお、道成寺の絵とくに関連する教育上の試みについては、他に海津一朗・吉村旭輝「紀州研ミュージアムボランティア報告 新編「道成寺縁起絵解き」」(和歌山大学『紀州経済史文化史研究所紀要』三二号、二〇一〇・一二)がある。
- (5) 渡辺麻里子「深浦円覚寺(真言宗醍醐派)における聖教調査——町民参加型「青森モデル」について」(第二回 日本宗教文献調査学 合同研究会、二〇一八・一〇)。
- (6) 大橋直義「小学校国語における狂言「柿山伏」——異文化理解にむけて——」(『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』六九集、二〇一七・二)。